

## 化学者田村典瑞、医師有田兔毛三

——与謝野門下東京新詩社歌人・田村黄昏の尊属について——

### 宮 本 和 歌 子

はじめに

佐藤春夫や吉井勇、森鷗外らとともに明治末期の『明星』や『スバル』誌上を彩った一人に、東京新詩社の若手歌人田村黄昏、本名田村豊彦（明治十九年（一八八六）二月二十日〜昭和八年（一九三三）十一月九日）がいる。彼は東京帝国大学卒業年である明治四十五年（一九一三）以降、存命中には歌をほとんど発表しないまま生涯を終え現在では生没年月日や経歴も定かでない。だが、父・田村典瑞と母・奥山つ祢の二男として出生、第三高等学校入学直後に寮の仲間と作歌会を結成し卒業を数ヶ月後に控えて与謝野寛率いる東京新詩社に加入したこと、東京帝国大学法科大学政治学科入学の一年後、新設された東京帝国大学法科大学経済学科入学に再入学していたことが遺族の協力により判明し、拙稿「与謝野門下新詩社歌人・田村黄昏について」——略年譜の作成、田村黄昏ならびに与謝野寛未発

表歌の紹介」に略年譜を掲載している。<sup>1)</sup> 大正元年（一九一二）十月の帝国大学卒業から数年経って大阪織物株式会社の社員となり、私生活では二度の結婚をし死の四年前に第一子、死の十一月前には第二子に恵まれ穏やかな晩年であったこと、彼の七回忌に妻と旧友の尽力によって作成された田村黄昏私家版歌集『黄昏』が存在することも明らかとなった。『黄昏』に収録されている多数の未発表歌は、紅灯の景色や若者の懊惱を中心とした歌から会社勤めの倦怠、さらには我が子への愛を中心とした晩年の歌へと歌風の変化を如実に表している。<sup>2)</sup>

豊彦と同年同月同日生まれで同時期に東京新詩社で活動をしていたのが石川啄木であるが、綿密な伝記的研究により啄木の生涯を明らかにした岩城之徳は自著『補説 石川啄木伝』（昭和四十三年（一九六八）四月さるびあ出版）第三章において、「作家の伝記を調べるには研究者によって種々の方法がとられ、独自の調査が試みられているが、従来のでられた伝記について一致していえることは、家系を調べ、両親の閲歴や性格を探り、作家の生い立ちを調査して、その思想と芸術がいかなる素質と環境によって決定されたかを綿密に考察していることである。／＼一般にこの種の調査は文学の成立に直接関係のない問題として等閑にふされているが、作家の性格や文学的素質を明らかにするにはこうした調査は不可欠の要件であって、これを無視して伝記研究の前進はありえない」と述べている。岩城の述べる手法は伝記研究に限らず作品研究においても意味のあることで、殊に田村黄昏のように生没年も経歴も不明であった人物の作品を研究していくにあたっては、どのような家系のどういった両親の下に生まれ育ち、いかなる環境において人格が形成され思想や芸術性が培われていったのかを把握しておく必要があるため欠かせない。

豊彦が歌の道に踏み込む素地がいかにして形成され後年の作歌活動にどのような影響しているかを探るため、豊彦の父親であり明治期を代表する化学者の田村典瑞、豊彦の母方祖父奥山金剛と母方叔父有田兎毛三、奥山金剛の妻とも母とも言われる江戸期の女流俳人李郷と金剛の父である下館藩家老奥山小一兵衛について調査を行ったが、本稿で

は田村典瑞、有田兎毛三について取り上げる。

## 一 父・田村典瑞

遺族提供の戸籍謄本には、豊彦の欄に父田村典瑞（写真1）、母つ祢（写真2）と記載され、「明治四十一年十一月五日前戸主典瑞ノ死亡ニ因リ家督相続届出同月十三日受附」とあり前戸主との続柄は田村典瑞二男、つ祢の欄には奥山金剛と三保を父母とする長女とある。田村典瑞の死亡日であるが、過去帳でも平成二年（一九九〇）に新調された田村家の墓に添えられた墓誌でも、明治四十一年（一九〇八）十一月三日となっている。また、豊彦は明治四十二年（一九〇九）十月『スバル』第十号に「霜月の三日の夕ぐれ瀬戸の海しぐるる時に眼閉ぢ給ひぬ<sup>4</sup>」という、典瑞が十一月三日夕に亡くなったことを意味する歌を發表している。田村家が典瑞の命日を十一月三日と認識していることは明らかであるが、戸籍謄本にはつ祢の欄にも「明治四十一年十一月五日夫典瑞死亡ニ因リ婚姻解消」と記され、『官報』第七六一三号（明治四十一年（一九〇九）十一月十日大蔵省印刷局編）にも（前略）正六位勲五等田村典瑞ハ本月五日孰モ死亡セリ」とあり、公的な記録では十一月五日が典瑞死亡日となっている。遺族が保管している典瑞一

写真2（遺族提供）

写真1（遺族提供）

周年忌埋史印影<sup>(5)</sup> (写真3) には、「旧壬生藩之土安政三年六月一日生」と生年月日の記載があり、典瑞はグレゴリオ暦一八五六年七月二日生まれの満五十二歳、享年五十三で死去している。<sup>(6)</sup> 戸籍謄本に記されたつ弥の生年月日は文久元年五月六日（一八六一一年六月十三日）で、「茨木<sup>ツギ</sup>真壁郡下館奥山麓妹明治十四年六月十七日田村典瑞ト婚姻届出同日入籍」とあり、満二十歳で典瑞と結婚し満二十四歳で二男の豊彦が生まれ、満四十七歳で典瑞と死別している。

典瑞の経歴を追ってみると、過去帳から慶応元年八月二十八日

（一八六五年十月十七日）、満九歳の時に父・伴左エ門を亡くし田村家当主となつてゐることが、遺族所蔵の壬生藩の印が押された辛未六月二十四日（一八七一年八月十日）付証書からは肥という典瑞の幼名が判明する。<sup>(7)</sup> 『東京開成学校生徒月表』第五号（明治九年（一八七六）第五月東京開成学校）には、製作学製煉予科第一級の生徒として田村典瑞の名前がある。満十六歳を迎える明治五年（一八七二）の戸籍編成時に典瑞という名を登録し、以降典瑞を名乗つたのだから。

『東京開成学校編『東京開成学校一覽』（明治八年（一八七五）二月東京開成学校）』には「入学ハ每学歳ノ始メ一回トシ九月十一日ヲ以テ期日トス」とあり、典瑞は明治八年（一八七五）九月十一日に満十九歳で東京開成学校予科に入學している。前掲『東京開成学校一覽』に「東京開成学校ハ文部省ノ所轄ニシテ諸専門ノ生徒ヲ教育スル官立大学校ナリ」とあるが、東京開成学校は明治十年（一八七七）四月東京医学校を合併して東京大学となり「法理医文ノ四学

写真3（遺族提供。印影に十一月二日没とあるのは三日の誤りだろう。）

部二分チ乃チ法理文ノ三学部ヲ旧開成学校ニ置<sup>8</sup>き、同年十二月十九日には初の卒業生として化学生三人に卒業証書が授与されている。典瑞は東京大学の本科へは進まず、工業之日本社編『日本工業要鑑 第二版』（明治四十年（一九〇七）発行月不明、工業之日本社）には「田村典瑞 分析化学、東京開成学校（官立）卒業／明治十年廃校」と学歴が記載されている。

明治十六年（一八八三）四月十六日には栃木病院薬剤員兼栃木県師範学校二等教田村典瑞依願解任の記録があり、<sup>9</sup>明治十四年（一八八一）の結婚後、壬生藩のあった栃木県で師範学校教員と栃木病院薬剤員を兼任して暮らしていた時期があったことがわかる。明治十四年（一八八一）『栃木県治提要』によると栃木病院開設は明治九年（一八七六）九月創立で、<sup>10</sup>典瑞は東京開成学校廃校後、旧藩時代の縁により栃木病院に勤務したと推測される。田村家過去帳には明治十八年（一八八五）に四歳で亡くなった典瑞の長男・肥が記されているが、長男が生まれたのも典瑞が栃木県で勤務していた頃だろう。

県師範学校教員の依願解任は鹿児島赴任のためであったと推測され、鹿児島県編『鹿児島県史』第四卷（昭和十八年（一九四三）三月鹿児島県）に、典瑞の明治十六年（一八八三）四月鹿児島医学学校附属病院薬局長就任が記録されている。『官報』第五百十号（明治十六年（一八八三）十二月二十六日大蔵省印刷局）の衛生事項欄には、鹿児島県による井戸水検査結果報告として、「鹿児島県ニ於テハ本年七月ヨリ九月迄ニ該地病院薬局長田村典瑞ヲシテ（中略）合二十五町戸数五千五百十八戸ノ井水（一家用並ニ共用トモ）三百六十個ヲ検査セシメタル（下略）」とある。<sup>11</sup>

前掲『鹿児島県史』第四卷には鹿児島医学学校設立当初の職員の一人在田村典瑞だとあるが、『鹿児島県職員録 明治十七年四月一日調査』を参照すると、明治十七年（一八八四）には典瑞は鹿児島医学学校三等教諭に名を連ねている。<sup>12</sup>明治二十年（一八八七）六月には鹿児島県地方衛生会委員に任命されているが、<sup>13</sup>豊彦が生まれた明治十九年（一八八六）

は典瑞が鹿児島県で勤務していた時期に相当する。豊彦の出生地に関して、遺族宅に残る田村黄昏私家版歌集『黄昏』の草稿には東京生まれとする第三高等学校時代からの友人の記述があり、戸籍からは東京市芝区本芝材木町十番地が最初の本籍地であつたらしいことが確認できる。長男を亡くして一年も経っていないつ衾が実家のある東京に戻り豊彦を出産した可能性もあるが、新幹線や飛行機で九州から東京へ移動できる時代ではなく、里帰り出産をしたとは考えにくい。鹿児島生まれであるが本籍地が東京であるため『黄昏』草稿に東京生まれと記されたと推測するが、現時点では豊彦の出生地を断定する材料はなく、鹿児島生まれの可能性が極めて高いとするととどまる。

鹿児島県時代の典瑞の任務であるが、鹿児島県病院薬局長として行った井戸水検査は明治期に複数回の大流行をみたコレラ対策の一環とした衛生状態改善のため、地方衛生会もコレラ対策のため設置されたものである。江戸期に続き明治期の日本はコレラ大流行に複数回見舞われているが、明治十年（一八七七）八月二十七日付で「虎列刺病予防法心得別冊編成相達候条実地流行ノ際ニ於テハ更ラニ該法ヲ考訂斟酌シテ臨時相達シ候儀モ可有之候得共予防方法ノ儀ハ病毒侵入ノ前予メ注意ヲ要スル事件不少ニ付為心得此旨相達シ候事」という内達乙第七十九号が、東京府を除く府県に発せられている。<sup>15</sup>「虎列刺病予防法心得」は、「第一条 外国地方ニ「虎列刺」病流行シテ内務省ヨリ檢疫規則ノ施行ヲ命スルトキハ開港場アル地方長官ハ医員衛生掛リ警察吏等等撰定シテヲノ委員トナシ外国領事ニ協議シ該規則ヲ遵奉シテ予防拒絶ノコトヲ担任セシムベシ」と始まっている。<sup>16</sup>コレラ流行地から入港した船舶は檢疫を受けた上、必要に応じて待機を求める第二条のほか、医師により感染者の報告があれば地方官が状況を調査し、アジアコレラに感染していることが確認された際は内務省と管轄地方庁ならびに近隣地方庁へ報告を求める第七条<sup>15</sup>、日々の感染者数を把握し毎週土曜日に地方庁から内務省への報告を義務付ける第九条<sup>19</sup>、コレラ流行時には祭礼等の人が集まる催しを地方長官が禁止するよう求める第十四条<sup>20</sup>など、感染拡大防止のために様々な対策が講じられていた。明治十二年

(一八七九)には内務省に中央衛生会と地方衛生会が開設されたが、地方衛生会規則第二条において医師や府県会議員の他に公立病院長や公立病院薬局長を含む面々で同会を編成することと規定されていることから、典瑞が鹿児島県病院薬局長に任命された時点でコレラ対策を講じる地方衛生会委員への選出は内定していたようなものであった。

しばらく鹿児島でコレラ対策業務に従事した後、明治二十一年(一八八八)三月の鹿児島医学校廃校に伴い典瑞は明治二十一年(一八八八)から明治三十年(一八九七)まで農商務省の技手として東京で勤務し、明治三十一年(一八九八)五月六日には大阪高等工業学校教授に叙任されている。『大阪高等工業学校一覧 従明治三十九年至明治四十年』(明治四十年(一九〇七)一月大阪高等工業学校)、『大阪高等工業学校一覧 従明治四十年至明治四十一年』(明治四十年(一九〇七)十二月大阪高等工業学校)にも応用化学科教授として典瑞の名が記されているが、つ弥の兄である奥山麓<sup>(26)</sup>の長男・奥山保も明治三十六年(一九〇三)頃からしばらく同校窯業科で図案を教える助教として勤務し、大阪市東区農人橋の典瑞方に一時期下宿していた。<sup>(27)</sup>

典瑞は明治四十年(一九〇七)には六月八日付で大阪鉱山監督署分析課長に任命され、<sup>(28)</sup>明治四十一年(一九〇八)五月一日調査の官庁職員録にも分析課長、大阪高等工業学校教授として記載されている。<sup>(29)</sup>明治四十年(一九〇七)八月五日の『農業雑誌』には、「伊予の煙害」として「伊予の別子銅山は四阪島に精煉所を設け居れるより、該島に接近せる同県越智郡東海岸地方は同所より発する鉍煙の爲め農作物の被害甚だしき由は予て聞ける所なるが、過般実況を視察せる越智郡長の報告によれば、稲は其の害最も甚だしく、就中日吉村大字別府及び宮の下に於ける百町歩ほどは最も激甚にして近時稀に見る所の惨況を呈し葉尖枯死せるもの多しと云ふ」<sup>(30)</sup>と報じられ、次号の同年同月十五日『農業雑誌』に掲載された「伊予の煙害続報」では、煙害に悩まされている地区の有志が集まって決定した事項を知らせている。その中には、「煙害問題解決の事を懇請すると共に、尚ほ進んで調査の必要あるを以て、農商務省へ技師の派

遣及び県技師の派遣、調査会の活動等より県費にて調査費を支出せらるゝ様予算に編入すること、其の他調査所に関する事等総て知事に懇請する事」という一文が含まれている。<sup>(41)</sup>

四阪島の煙害は足尾銅山の公害と並ぶ甚大な被害という認識が強まり、「鉦山の煙毒問題」と題して次のような記事も登場している。

昨年来足尾に別子に抗夫の同盟罷工流行して社会の不安を醸したるは予輩の記憶に新たなる所なるが、それと性質を異にすれど、今や又鉦山煙毒問題なるもの、近く別子に起るに至りたり（中略）今回の四阪島煙毒問題の足尾に比して其害を及ぼせる程度如何を知る能はざるも、附近農民の一揆して当事者に迫り、或は其被害の程度を指示して之れが損害賠償を訴へんとするに見其害の決して軽々看過すべきものにあらざるを知るなり、されど農民の提言せる所、当事者に於て悉く之れを納得する能はざるはいふまでもなし、既に其提言せる所に精煉所廃止、或時期に於ける作業中止を言へるの条項あれど、此くの如きは営利事業として絶対に行し得べきものにあらず住友家の之れに対する方針如何は未だ知る能はざれど予輩は此種問題に対しては徳義上、特に同家の反省儆戒を要する所あらんを望まざるを得ざるなり<sup>(42)</sup>

これを受けて明治四十一年（一九〇八）九月五日に大阪鉦山監督署から調査団が派遣され、<sup>(43)</sup> 典瑞もその一員として四阪島へ行っている。『工業之大日本』第五卷第十一号には、「鉦業と農業との利益衝突問題として一時八箇週間かりし別子銅山、四阪島製煉所煙害事件に関し関係地方人民は勿論地方庁鉦山局住友家俱に協同して各専門技術家を派遣し各方面に亘りて詳密なる被害の調査に後事し日を閲する事前後五句略其の大体を終へたる模様なるが昨日帰阪したる大阪鉦山監督署分析課長田村典瑞氏の談によれば（下略）」という同年十月二十一日付の典瑞談話記事が掲載されている。<sup>(44)</sup>



大植四郎編『国民過去帳 明治之巻』（昭和十年（一九三三）十二月尚古房）には田村典瑞は「明治四十一年十一月五日大阪府東成郡天王寺村の自宅に没す」とあるが、豊彦の遺族には典瑞は公害調査のため出張中に事故で亡くなつたと伝わっている。過去帳には「伊予国越智郡四阪島ニ没ス」とあり、典瑞一周年忌埋史印影にも「没於任地」とある。豊彦の七回忌に際して編まれた田村黄昏私家版歌集『黄昏』所収の、「荒金を吹くてふ島の白けぶりみなぎる上に父は在さむ」「秋の海香爐のごとく浮びたる四阪の島の白き煙よ」「瀬戸の海神代のままに島どもの浮ぶを見れど慰まぬかな」という明治四十一年（一九〇八）に詠まれた歌は、銅の精錬工場があつた瀬戸内海の四阪島に危篤の典瑞が滞在していたことを示している。

典瑞の死因については、「或時学校から四国の或る地方に出張せられた時大酔の余旅館の二階から落ちられ、其れが因をなして終に旅の空で客死せられた」と彼の教え子が記し、確かに出張中の事故ではあつたが調査中の事故ではなく、旅館で泥酔しての事故であつたことがわかる。田村黄昏私家版歌集『黄昏』には、「わが父の死の病と聞きてゆく夜汽車のなかに眠る弱さよ」「忘れめや切岸の上の病院の窓より見たる有明の月」という歌がある。東京帝国大学在学中の豊彦が事故の知らせを聞き夜汽車で駆けつけるとき的心境と、典瑞が入院している四阪島の病院病室から有明の月を眺めた様を詠った歌であるが、明治四十一年（一九〇八）十月二十日の月齢が二十四・五、十月二十五日は月齢二十九・五の新月、田村家が認識している典瑞命日の十一月三日は月齢八・八、公式な典瑞命日の十一月五日は月齢十・八で、危篤の典瑞が寝ている病室の窓から有明の月が見えたであろう日は十月二十日からせいせい十月二十三日までである。典瑞が九月五日からの四阪島煙害調査を終え帰阪したと『工業之大日本』第五卷第十一号で報じられた日付が十月二十日であるが、典瑞死去は帰阪の約二週間後である十一月三日、公的には十一月五日である。『工業之大日本』の記事や豊彦の歌の内容に従えば、典瑞は十月二十日に帰阪し翌日インタビューを受けた後すぐに四阪島に戻

り、直後に大酒を飲んで旅館で事故に遭い二週間弱の危篤状態を経て没したと推測される。

豊彦と典瑞の親子仲は良好であったらしく(写真4)、『黄昏』にも「いと強き葉をわれの心臓にしばしば注せる父は今亡し」「あながまや思ひ出して嘆くほどひとりの父を未だ忘れず」「ひとひらの写真のほかにありますこし父に近かるものあれかし」という父の死を嘆く未発表歌を残し、父の死後数年経過した明治四十四年(一九一)以降に詠まれた歌でも「弟のものを云ふとき亡き父の声をふと聞くときのかなしさ」と詠っている。日本中で猛威を振るい多数の死者を出したコレラへの対策、農民を悩ませた煙害問題の解決に向けた調査など公衆の衛生と健康のため奔走し、次世代を担う若者の教育にも貢献した典瑞<sup>(36)</sup>であるが、仕事一辺倒でもなかったようだ。

豊彦遺族宅に残る明治二十八年(一八九五)六月十八日付消印の押された田村典瑞宛葉書には江戸期の南画家・鉤雲泉の画について典瑞が問い合わせた回答が記され、雲泉の経歴が詳しく説明されている。典瑞も会員であった大本窯業協会発行の『大日本窯業協会雑誌』第四卷第四十五号(明治二十九年(一八九六)五月)や『大日本窯業協会雑誌』第五卷四十九号(明治二十九年(一八九六)九月)には、典瑞所蔵の柿右衛門製皿図や薩摩焼水指図が掲載されているが、飛鳥井黄と命名された黄色釉下顔料の原料となる鉱物を分析しフェルグソナイトであることを突き止めたのも典瑞である<sup>(37)</sup>。寛永銭研究会にも参加し、『寛永銭研究会報告』第十六号(明治三十一年(一八九八)二月寛永銭

写真4(遺族提供。左から父・典瑞、弟・徹、豊彦。)

研究会)の「寛永泉志評判記」には「田村典瑞君曰 御新著の寛永泉志篤と拝読仕候処事実之調査周到感服罷在候且錢図の精密なる未だ嘗て見ざる所なり云々」という文がある。『寛永錢研究会報告』第五号(明治三十年(一八九七)三月寛永錢研究会)掲載の進而堂名義「寛永錢の分析に就て」という記事では、「今回農商務省技師田村典瑞氏に依頼して左の二錢を分析し見るに面白き成績を得た」とあり、背文字錢、島屋無背錢の二種について銅、錫、鉛、金、銀の含有率分析結果が報告されている。

典瑞の元教え子が出版した『創作 海』では、典瑞を「化学分析に就いては当時に於ける日本有数の大家であつた」と評しているだけでなく、「化学工芸会々員三幅対」と題して大阪高等工業学校の教員や生徒を特徴毎に分類した表では、典瑞を「骨董家」に含めている。<sup>(38)</sup>「右の三幅対なる評は誰れがつけたのかは知らないが、可なりに観察眼を持った人々の批評であつて、満更の妄評ではないと感じてゐる」<sup>(39)</sup>ともあり典瑞の骨董好きはよく知られていたようだ。息子の豊彦もまた骨董品を好み古い食器を蒐集し、それらの品は子孫に受け継がれているという遺族の話である。豊彦は絵画の練習も行っていたらしく栗の実を描いた色紙も発見されているが(写真5)、絵画といえば一時期典瑞方に寄宿していた豊彦の従兄・奥山保の得意としたところで、東京美術学校を出た奥山保は幕末から明治にかけて活躍した日本画家在原古玩、川崎千虎、福地復一、今泉雄作に師事し古研と号していた。<sup>(40)</sup>豊彦の文芸への関心は家庭において醸成された可能性が高いと考えられるが、それには親密な関係であつた母・つ祢の実家である奥山家の人々が少なからず影響していたようである。

写真5 (遺族提供)

## 二 母方叔父・有田兔毛三

下館町郷土史調査会編『下館町郷土史』には、郷土出身の芸術家の一人として「一、奥山金剛（本名毅）。下館藩家老なり詩書を善くし又篆刻に巧なり。（横浜市住医学博士有田不二氏は金剛翁の孫に当れり）／一、奥山麓。茨葉と号す、金剛翁の嫡子なり、詩書を善くし又大塊翁に就き南画を学ぶ<sup>(41)</sup>」と豊彦の母方祖父、母方伯父が詩書の名人として挙げられている。金剛翁の孫とある有田不二は、茨城県史研究会編『茨城県史』の「下館藩家老職後裔／有田兔毛三氏／医を業とする傍町会長衛生組合長を勤む」という章に、「夫人との間に、三男一女あり。長男不二氏は、当年三十一歳、大正十三年東京帝大医学部卒業、目下帝大小児科に勤務中、四男耕蔵氏は三十歳、東京帝大工科出身、三男千畝氏は二十七歳である<sup>(42)</sup>」とある。有田不二の父親である有田兔毛三に関しては、同じ記事で「茨城県真壁郡下館町に、慶応二年二月二十一日に呱呱の声を挙げらる。少時より頭脳明敏、諸芸に堪能にして、未来を囑目せられて居た。殊に氏は下館藩家老職の後裔にして、祖先には歴史上有名な人をも出して居られるが、就中県史上有名なは奥山金剛氏にして、氏は金剛氏の血を受けて居られるだけに、書道篆刻の方面に於いては、早くより一家をなす程の腕を持つて居られた。また氏は夙に漢籍を学ばれ、その方に於いても秀才の誉を擅にして居られた」と説明されている<sup>(43)</sup>。

有田兔毛三の生年は、工藤鉄男編『日本東京医事通覧』（明治三十四年（一九〇一）十一月日本医事通覧発行所）には「慶応三年二月生」、日本杏林社編『日本杏林要覧』（明治四十二年（一九〇九）十二月日本杏林社）でも「慶応三年生」、河野二郎『帝国医鑑』第一編（明治四十三年（一九一〇）五月旭興信所）には「慶応三年二十四日」とあり、慶応二年（一八六六）とする『茨城県史』に対し多くの書籍で慶応三年（一八六七）とされている。生まれた日を二十一日とする『茨城県史』と二十四日とする『帝国医鑑』があるが、「各府県衛生課の台帳と各医師会の名簿とを照

合し、加ふるに出張の際直接聴取の原稿を更に卒業学校名簿其他の方面に厳密の調査を行ひ其の正確を期したり」という土屋義衛『昭和十一年版 日本医籍録 附録 医学博士録、法規』（昭和十年（一九三五）六月医事時論社）には慶応二年（一八六六）二月二十一日生まれとある。豊彦遺族宅には「大正十五年丙寅二月二十一日還曆誕辰撮影」と書かれた兎毛三の還曆記念写真（写真6）があり、慶応二年（一八六六）二月二十一日生まれが正しいのだろう。

つ祢より五歳下の弟、豊彦の母方叔父が有田兎毛三だが、彼は奥山

姓ではない。帝國秘密探偵社編『第三版 大衆人事録 ア・ソ之部』（昭和五年（一九三〇）七月帝國秘密探偵社、帝國人事通信社）には、豊彦の母方従兄である奥山保の項に、「東京府人奥山麓の長男明治十二年三月九日東京市芝区に生れ後家督を相続す同三十三年東京美術学校図案科を卒業し大阪高校助教授を経て同四十四年三越呉服店入り現に図案部勤務たり」とある。兎毛三には麓、正路という少なくとも二人の兄<sup>45</sup>がいただけでなく、彼が満十三歳となった明治十二年（一八七九）には長兄の麓に男児が誕生しており、奥山家は家督継承者の代替要員として兎毛三を確保しておく必要がなかったことは明白である。何歳の時か不明であるが兎毛三は奥山家から有田家へ養子に行き、有田姓を名乗っていたのだろう。

日下部義三編『最近東京医士名鑑』（明治四十五年（一九一三）五月医事通信社）では兎毛三の経歴を、「有田君の如きは実に医師として先天の性を享けたるの人なる可し。君は茨城県真壁郡下館町字本城の人にして、慶応三年二月を以て生まる、夙に医学に志す此時に当り君の嚴父は軟弱なる都塵の風を嫌い、遠く君をして九州に赴かしめ鹿兒島

写真6（遺族提供）

医学校に入学せしむ、刻苦幾年明治二十年十二月全科卒業し、亟で内務省医籍に登録さる、其翌年上京し都下名医を歴訪して実修の後同二十三年四月頃現住所に開業す」としている。前掲『茨城県史』では、「医を志して、明治二十年鹿児島県立医学校を卒業せられ、在学中成績優秀、性行また優れて良好なりしをもつて、卒業と同時に懇望せられて、同校に勤めらるることとなり、(中略)明治二十三年には上京して自ら開業し、(中略)氏はかくの如く、常に門前市をなす程の多忙な医師としての傍、社会公共のためにつくすことならば、何でも非常に喜んで引受けられ、(中略)会つては町会長や衛生組合長の如き、誠にうるさき犠牲的の仕事のために努力せられしことあり」と、優れた人格と才能を記している。前掲『帝国医鑑』に兎毛三は明治二十年(一八八七)七月二十三日「試験合格ニ依テ免状下附セラル」、前掲『杏林要覧』にも「試験二十年七月」とあり、明治二十年(一八八七)鹿児島医学校卒業、試験合格は複数の資料で一致している。

市岡正一編『学事要務』(明治十五年(一八八二)十二月博聞社)によると、明治十五年(一八八二)五月二十七日文部省第四号府県達の医学校通則で、「医学校ハ之ヲ分テ甲乙二種トス甲種ハ尋常ノ医学科ヲ教授シ以テ医師ノ具成ヲ図リ、乙種ハ簡易ノ医学科ヲ教授シ以テ医師ノ速成ヲ図ルトキ若クハ甲種ヲ設置スル能ハサルトキニ於テ下疑ニ遵ヒ之ヲ設置スル」と定められていた。第一章掲『鹿児島県史』第四巻には「本県医学校は乙種に相当し」、「修業年限は三ヶ年で、これを分つて三学年とし、学年は五月一日に始り、翌年四月三十日に終る」、「入学生徒は満十八年以上の者と定められてゐた」とある。明治二十年(一八八七)に鹿児島医学校を卒業するには明治十七年(一八八四)五月までに入学している必要がある、慶応二年(一八六六)二月生まれの兎毛三は同校に入学可能な最少年齢の満十八歳で入学していたことになる。

父の意向で兎毛三は遠方の医学校に入学することになったと前掲『最近東京医士名鑑』にあったが、義兄・典瑞が

鹿児島病院や鹿児島医学校に勤務していた縁で、兔毛三は鹿児島医学校を選択したと推測される。南日本新聞社編『鹿児島県百年（中）明治編』（昭和四十二年（一九六七）十一月謙光社）には、「医学校では一年目に物理、化学、解剖学、生理学、薬物学などの基礎を勉強し二年目から内科、外科の総論に入り、三年目に産科、眼科など各論の講義を受けた。基礎学科の講義は田村典瑞、池盛大、秋山金也の三教授の担当である」と、全入学者が典瑞の授業を一年目に受けることになっていたと記されているが、兔毛三も義兄による基礎学科の授業を受けたことであろう。

典瑞と兔毛三の鹿児島時代の住所は不明だが、一時期典瑞方に下宿していた奥山保のように、満十八歳で進学のため鹿児島にやってきた兔毛三が姉夫妻宅に下宿あるいは近居していた可能性は高い。姉夫妻が長男の肥を亡くした明治十八年（一八八五）、豊彦が誕生した明治十九年（一八八六）も鹿児島医学校在学中であった兔毛三は、典瑞、つ祿夫妻の第一子を失った悲しみや豊彦誕生の喜び、豊彦の成長を最も近くで見守った親族であったと考えられる。

兔毛三は明治三十八年（一九〇五）春頃、「談笑娯楽の間に考古に関する器物及書画等を蒐集展覽し互に其智識を交換するを以て目的とす」<sup>(46)</sup>る集古会に入会し、会合で奥山金剛の作品を披露することもあった。<sup>(48)</sup>大正九年（一九二〇）から筑波山の美称である紫峰を号として集古会の活動に参加するようになり、「広前に鐸のひびくや雪の晨」という有田紫峰名義の俳句も集古会会報『集古会誌』に掲載されている。<sup>(49)</sup>『集古会誌』誌上で紫峰名義が確認できるのは、大正九年（一九二〇）五月八日午後一時より上野公園梅川で開催された第百二十八回集古会に、会員余技製作品として提供した「自刻鵬斎七絶斑竹香筒」<sup>(50)</sup>一個の出品記録が最初である。この時の会合課題である木彫品に於じて出品した奥山金剛刻書帙や飛騨一刀彫根附亮直作兔、木彫家兔根附は有田兔毛三名義であり、骨董出品は兔毛三名義、余技製作品出品は紫峰名義と使い分けている。兔毛三は豊彦と同じ昭和八年（一九三三）に没し、『集古会誌』癸酉第三号（昭和八年（一九三三）五月集古会）には、「有田兔毛三 本会評議員、常陸下館に生れ印人奥山金剛を父とす医を業とし

て日本橋久松町に住す、横浜に移居して間もなき昭和八年二月二十五日六十八歳にて没す」と訃報が掲載されている。

第一章で触れた典瑞一周年忌理史印影は、豊彦が文字を記し有田兎毛三が石を彫って作成された兎毛三と田村家の親密さを伝える品であるが、昭和五年（一九三〇）の典瑞二十三回忌法要で撮影されたと推定される遺族提供の写真（写真7）にも豊彦や妻の姚子（たよこ）と幼い娘・寿子らとともに兎毛三が写っている。結婚して家を出た豊彦の妹たちは写っており、昭和五年（一九三〇）二月に結婚したばかりの弟・徹と新妻のエイ、当時未婚だった妹・幾子<sup>(註)</sup>が写真に納まっている。ごく親しい親族のみが集まったらしき田村家の法要に参加し、前述の還暦記念写真も豊彦に贈っていることから、兎毛三は晩年まで姉や甥のいる田村家と親しく交流していたことがわかる。

豊彦遺族宅には、豊彦が少年時代に書いた紀行文や学校の課題作文、学生時代に友人と交換した絵葉書等が多数残っている。その中には豊彦が大阪府第五中学校、後の天王寺中学校二年生として在籍中の明治三十二年（一八九九）七月三十日から八月十一日までの十三日間、大阪から四国、中国地方を旅した際の紀行文『四国中国紀行日誌』や、天王寺中学校五年生になる直前の明治三十五年（一九〇二）三月、大阪から奈良月ヶ瀬までの友人との旅行を記した田

写真7（遺族提供。昭和5・1930年11月典瑞23回忌と推定。前列左端有田兎毛三、前列右端姚子と娘・寿子、中列右から二番目つ祿。後列左から二番目徹、同三番目豊彦。後列右端幾子、同右から二番目エイ。中央には写真1と同じ写真が置かれている。）



村鈍太郎名義『春雨日記』という道中記がある。十六歳の豊彦が書いた『春雨日記』は鈍太郎という名義をはじめ同行の友人も猿松、抜作など滑稽な名を用い、道中の連句を挟んでいる点は、『東海道中膝栗毛』を意識したふしがある。遺族の保管している明治四十四年（一九一七）一月三十日付の豊彦の日記には、勉強する気も起らないので炬燵で膝栗毛を読んでいたという記述があるという。<sup>(53)</sup>一方、大正九年（一九二〇）九月十九日通信博物館内で開催された百二十九回集古会において、宿駅に関する物という課題に対し、兔毛三は「ガラス船淀川一覽」や「成田道中記」、「びわ湖一覽」などの「道中記紀行類 十四冊」を出品している。<sup>(54)</sup>兔毛三による道中記出品数の多さを見るに、平素から道中記や紀行を好んで蒐集していた可能性があり、豊彦も兔毛三も道中記や旅日記を好むという共通の趣味を有していたとみられる。

与謝野寛、晶子夫妻の仲介により豊彦の最初の結婚が決まった大正九年（一九二〇）と推定される、田村黄昏遺族蔵三月二十六日付与謝野寛、晶子筆田村黄昏宛書簡には、「御令妹様の御話の先方の法学士のことハ四五日中に委しく可申上候。その上にて叔父様のお手にて一度はお取調べを願上候」と、豊彦の妹に持ちかけた縁談に關し「叔父様」による調査を促す記述がある。この書簡の記述から、満二十二歳で田村家の家督を継ぎ戸主の立場にあり大正九年（一九二〇）二月に満三十四歳を迎えて縁談も決まっていた豊彦が、妹の人生を左右する重要な局面で依然叔父を頼り、与謝野夫妻に話をするほどであったことが判明する。

兔毛三と豊彦に關しては、正月明けてもずっと葉書一枚来ないと心配する豊彦に対し「有田には病人があるのです。それで御はがきがまだなのでせう」と記す一番上の妹・澄による葉書があり、前述した明治四十四年（一九一七）一月の豊彦の日記にも兔毛三と従兄・保の来訪が記されているなど親密な交流が確認できる。<sup>(55)</sup>一方、現時点では遺族宅に残る葉書や書簡、その他資料類からは典瑞の兄弟らしき人物の名が記されたものは発見されておらず、典瑞も含

めた豊彦の実家は父方親族よりも母方親族の奥山家と親密な関係であったことは疑いようがない。田村家奥村家ともに兎毛三の他に豊彦との交流が確認できる叔父がいないことから、寛に書簡で言及されている叔父はつ祢の弟である有田兎毛三と推定できる。明治四十一年（一九〇八）十一月に典瑞が亡くなった時、豊彦は満二十二歳であったが、一番大きい妹は十七歳、弟の徹は満十二歳、他に満十歳と満八歳の妹がいた。成長期の子供を複数抱えて未亡人となったつ祢は、子を失った悲しみや新たに子が生まれた喜びを最も近くで見ていた、有田家の養子となった弟・兎毛三を何かにつけ頼ったのだろうか、豊彦もまた出生時から身近にいた叔父の兎毛三を信頼し、私生活の相談だけでなく骨董や道中記などの趣味においても話題を共有し晩年まで交流を続けていたのだろうか。

遊興や長期旅行を頻繁に行い派手な暮らしをする与謝野家が兎毛三の目にどのようなように映っていたのか、甥が与謝野家との実際によって身を持ち崩すことを懸念した兎毛三が豊彦を諫めたり忠告したりといった行動を取ることにはなかつたのか。豊彦の遺品類から何かにつけ叔父の兎毛三と親しくしていたことは明白であるが、歌人としての在り方にどこまで兎毛三の関与があつたのか、今後新たな書簡や資料が発見され明らかになる可能性がある。

### おわりに

東京新詩社の新進歌人として活躍した田村黄昏の歌への関心がいかにして培われたかを調べるため、まずは父である田村典瑞と母方叔父である有田兎毛三を調査した。有田兎毛三は、戸籍謄本に豊彦の母であるつ祢が奥山金剛の長女と記されていたことから血縁関係が判明したものである。田村典瑞も有田兎毛三も古美術、古芸術に関心を持っていたようで、豊彦も彼等の影響を受けてか骨董品を好んでいた。豊彦二十五歳の時に典瑞が死去したが、豊彦は田村家の家督を継いでからも母方叔父の兎毛三を頼りにし親しく交流を続けていた。現存する資料を見ると豊彦は父方の

田村家より母方の奥山家と親密な交流があり、文芸への関心も兎毛三はじめ母方親族である奥山家の影響を強く受けたことは疑いようがない。

豊彦の母方祖父である奥山金剛は、『おらが春』に句が収録されている李郷という女流俳人の夫とも息子ともされ、李郷は第五代下館藩主石川総般の息女であるという。すなわち、豊彦は下館藩第五代藩主の直系子孫である。次稿では豊彦の母方祖父・奥山金剛と遺族宅から短冊が発見されている女流俳人李郷の関係を明確にし、金剛の父親であり豊彦の母方曾祖父・奥山小一兵衛についても詳しく調査、豊彦が奥山家からいかなる影響を受けたかを考えていく。

## 注

(1) 令和五年(二〇二三) 九月京都女子大学国文学会『女子大国文』第百七十三号掲載。

(2) 第一子誕生以降に豊彦が子供をテーマに詠んだ歌に関しては、令和五年(二〇二三) 九月京都大学文学部国語学国文学研究室『京都大学国文学論叢』第四十九号掲載の拙稿「与謝野門下新詩社男性歌人による愛児の歌——田村黄昏、万造寺齊の歌集から——」で論じている。

(3) 過去帳と墓誌を参照すると、長男・肥は明治十八年(一八八五)三月十六日に四歳で亡くなり、豊彦童子という戒名が付されている。長男の死から間もなくして授かった二男・豊彦の名は、長男の戒名から命名されたものだろう。豊彦の戒名は浄光院転誉法輪彦達居士である。典瑞の三男・猛彦は明治二十二年(一八八九)七月三日に三歳で、四男・四郎は明治二十三年(二八九〇)二月二日に当歳で、五男・敏雄も明治二十七年(一九〇四)四月三十日に亡くなっている。成人した典瑞の息子は豊彦の他に、明治二十九年(一九〇六)四月二十四日に生まれた六男の徹だけである。

(4) 田村黄昏私家版歌集『黄昏』には「霜月の三日の夕ぐれ瀬戸の海しぐるる中に眼とち玉ひぬ」として収録されている。

(5) 「明治四十二年十一月三日一周年忌之陵与遺骨埋史 兎毛三刻」と墨書された和紙に押された縦十一・八センチ、横四センチの印影二つに、「大坂高等工業学校教授／鉢山監督所分析課長／正六位勲五等田村典瑞／旧壬生藩之士安政三年六月一日生明治四十一年十一月二日没於任地／男豊彦誌」とある。この埋史の現物は墓碑に添えられたと推測されるが、典瑞や豊彦の眠る田村家の墓は平成二年（一九九〇）に新調されているため、現物の所在も含めた詳細は不明である。

(6) 墓誌によれば典瑞の六男である徹は満四十三歳、享年四十五で死去し豊彦、典瑞も五十歳前後で没しているが、昭和七年（一九三三）十二月十日に生まれた豊彦の長男・照彦は令和四年（二〇二二）一月まで存命し、豊彦の妻・姚子（たよこ）も享年九十三と長命であった。つ称は豊彦の死から半年も経たない昭和九年（一九三四）四月六日に没しているが、豊彦が迎えて来て枕元に座っていると言いき残して亡くなったという遺族の話である。

(7) 「辛未／六月廿四日 非役士族 田村肥」と記されている。辛未は明治四年（一八七一）であるが、六月二十四日は廢藩置縣が実施された明治四年七月十四日（一八七一年八月二十九日）の約三週間前であり、壬生藩廃止に伴い田村家当主である田村肥の名義で発行されたと推定される。本文に記したように典瑞の父親は慶応元年（一八六五）年に没し典瑞が家督を継いでいるため、田村肥は後の田村典瑞と結論付けられる。安政三年六月一日（一八五六七月二日）生まれの典瑞はこの証書が発行されたとき満十六歳であるから、非役士族であっても何ら不思議はない。夭逝した典瑞の長男は、典瑞の幼名を授かり肥と命名されたのだろう。

(8) 東京大学法理文三学部編『東京大学法理文三学部一覽 従明治十四年至明治十五年』（一八八二）四月丸家善七刊  
参照、引用。

(9) 横田長司編『師範学校沿革誌』（明治三十八年（一九〇五）十月三共社活版所）「職員更迭の一束」に、明治十六年（一八八三）のこととして「四月十六日栃木病院薬剤員兼本校二等教田村典瑞依願解任」という記録がある。

(10) 栃木県『栃木県治提要』（明治十四年（一八八一）七月栃木県蔵版）に「栃木県医学学校附属病院初メ栃木病院ト名称シ明治九年九月ノ創立ニ係ル」とある。

- (11) 大蔵省印刷局『官報』第五百十号(明治十六年(一八八三)十二月二十六日)より引用。
- (12) 本文掲『鹿兒島県史』第四卷によれば、鹿兒島医学学校の最初の生徒募集は明治十六年(一八八三)一月で田村典瑞の他に設立当初の職員として記載されているのは島貫修平、石川小作である。明治十七年(一八八四)鹿兒島県庁編『鹿兒島県職員録』明治十七年四月一日調査(発行月不明、富山伸吉刊)には二人いる三等教諭の一人として「田村典瑞 栃木県士族」とあり、月俸は六十円である。
- (13) 『官報』第一一九二号(明治二十年(一八八七)六月二十一日大蔵省印刷局編)参照。
- (14) 豊彦の七回忌に作成、配布された『黄昏』は、彼の第三高等学校時代からの友人である小牧茂彦が収録歌を選び、序文を記したものである。遺族宅に残る小牧茂彦の採用されなかつた序文案に、「田村豊彦君は明治十九年二月二十日東京に生れ、東京市芝区鞆絵小学校、大阪の天王寺中学を経て、第三高等学校に入り、大正元年九月、東京帝国大学法科大学経済学科を卒業した」とある。東京帝国大学編『東京帝国大学一覽 従大正二年至大正三年』(大正三年(一九一四)一月東京帝国大学)によると豊彦の卒業は大正元年(一九一三)十月で九月卒業は誤りだが、典瑞の経歴や住所から鞆江小学校、大阪府立天王寺中学校を出たという経歴は正しいと考えられ、中学校時代の豊彦の作文類から中学校入学は明治三十一年(一八九八)であることも確定している。
- (15) 高木周次編『衛生公布類纂』(明治十三年(一八八〇)六月柳原喜兵衛刊)参照、引用。
- (16) 注(15) 同書より引用。
- (17) 注(15) 同書に「第二条 「虎列刺」 病流行ノ地方ヨリ来ル船舶ハ港外一定ノ地ニ於テ検査委員其船ニ就キ船長並ニ医官ニ患者或ハ死屍ノ有無ヲ尋問検査シ該病ニ罹ルモノ或ハ疑似ノ症状アルモノハ之ヲ避病院ニ移シ病者ナキモノト雖ドモ若干ノ時日ヲ限リ入港ヲ許サザルコトアルベシ」とある。
- (18) 注(15) 同書に「第七条 地方官ハ管内ニ「亜細亜虎列刺」病者アルコトヲ医師ヨリ届ケ出デタルトキハソノ病症ノ真偽ト諸症ノ緩劇トヲ詳カニシ若シ真ノ「亜細亜虎列刺」ナルヲ確認スルトキハ委員ヲ命ジ予防ノ方法ヲ著手シ内務省ニ申報シ且管内近隣ノ地方庁ニ報告スベシ」とある。

- (19) 注 (15) 同書に「第九条 地方庁ハ医師ヨリ日々出ス所ノ申牒ヲ集メ患者ノ数ト死者ノ数トヲ記シ毎土曜日之ヲ内務省ニ申報スヘシ」とある。
- (20) 注 (15) 同書に「第十四条 「虎列刺」 病流行ノ時ニ際シ地方長官ハ祭礼開市等無益ニ他方ノ人ノ群衆スル事件ヲ禁ズベシ」とある。
- (21) 注 (15) 同書に、明治十二年（一八七九）七月二十二日付の「内務省中ニ中央衛生会ヲ相開候条為心得此旨相達候事」という官院省使府県官達がある。また、明治十二年十二月二十七日第五十五号府県官達で「今般地方衛生会規則左ノ通相定候条此旨相達候事」とあり、構成人員を「医師三名乃至五名／府県會議員三名／公立病院長／公立病院藥局長／衛生課長／警察官一名」としている。
- (22) 大蔵省印刷局『官報』第一四二八号（明治二十一年（一八八八）四月七日）に明治二十一年（一八八八）三月三十一日をもつて鹿児島医学校と同附属病院を廃止する旨告示され、最初の生徒募集がなされた明治十六年（一八八三）から五年で廃校になっている。
- (23) 彦根正三編『明治二十一年十月改正官員録 甲』（明治二十一年（一八八八）十月博公書院）に農商務省分析課五等技手下として名前が挙がるのを皮切りに、明治三十年（一八九七）までの職員録に農商務省の技手として掲載され、『農商務省職員録 明治二十七年五月五日現在』（明治二十七年（一八九四）五月農商務省）には技手三級俸として「田村典瑞 東京府士族 牛込区天神町七十七番地」と東京市の住所も記されている。
- (24) 大蔵省印刷局編『官報』第四四五四号（明治三十一年（一八九八）五月九日）参照。三級俸下賜の三人目に「大阪工業学校教授 田村典瑞」とある。本文掲『大阪高等工業学校一覽 從明治三十九年至明治四十年』によれば、大阪織物株式会社の設立者で社長の平賀義美は明治三十一年（一八九八）十一月八日同校の商議委員に囑託されている。大学卒業後の豊彦が大阪織物株式会社に入社したのは、この縁によるものと推測される。
- (25) 川又銀蔵編、出版の明治十五年（一八八二）二月から明治十八年（一八八五）二月『茨城県職員録』各書により、奥山麓は真

壁郡下館町の真壁郡役所で書記や御用係準判任をしていたことを確認できる。

- (26) 内閣官報局『職員録明治三十六年 甲』(明治三十六年(一九〇三)発行月不明、印刷局)に大阪高等工業学校助教授として名前が挙がっている。

- (27) 本文掲『大阪高等工業学校一覽 従明治三十九年至明治四十年』、『大阪高等工業学校一覽 従明治四十年至明治四十一年』に窯業科助教授として「凶案 奥山保 茨城土」と記載されているが、前者には「東区農人橋二丁目番外二十九番屋敷(田村典瑞方)」とあり、後者では「東区南新町一丁目番外百十八番屋敷」と近隣の住所である。

- (28) 『官報』第七一八二号(明治四十年(一九〇七)六月十日大蔵省印刷局編) 参照。「大阪鉱山監督署分析課長ヲ命ス 鉱山監督署技師 田村典瑞」という農商務省の辞令が掲載されている。

- (29) 『職員録 明治四十一年 甲』(明治四十一年(一九〇八)印刷局) 参照。大阪鉱山監督署技師として「二等(兼) 分析課長大阪高等工業学校教授 田村典瑞」とある。凡例には「明治四十一年五月一日現在調査ニ係ル官庁樺太県及北海道府県庁府県ヲ除ク高等官判任官及各其待遇者其他主要ナル職員ヲ纂録シタルモノナリ」とある。

- (30) 『農業雜誌』第三十二卷第二十二、第九百九十三号(明治四十年(一九〇七)八月五日学農社) より引用。

- (31) 『農業雜誌』第三十二卷第二十三、第九百九十四号(明治四十年(一九〇七)八月十五日学農社) 参照、引用。

- (32) 『工業之大日本』第五卷第九号(明治四十一年(一九〇八)九月一日工業之日本社) 無記名記事より引用。

- (33) 『工業之大日本』第五卷第十号(明治四十一年(一九〇八)十月一日工業之日本社) では、「煙害地調査」という見出しに続き、「大阪鉱山監督署にては五日西尾技師外十二名を愛媛県越知郡桜井村、大島附近、同周桑郡四阪島に派遣し四阪島精練所の煙毒防御法が果して有効なりや其の影響如何等に付化学的調査をなさしむる事としたり」という九月七日付記事がある。

- (34) 『工業之大日本』第五卷第十一号(明治四十一年(一九〇八)十一月一日工業之日本社) 参照、引用。

- (35) 田沢震五『創作 海』(昭和四年(一九二九)四月新高堂書店) より引用。「はしがき」によればこの書籍は田沢の友人である田原剛造という人物が大阪高等工業学校入学から卒業までの五年間に見聞したことを詳細に記録したもので、「全部は実歴談で

ある」という。しかし、田原剛造が同校を卒業したという明治三十五年（一九〇二）七月だけでなく他の年月にもそのような氏名の卒業生は存在せず、同書に学校の仲間として登場する他の人物にも在籍や卒業の事実が確認できない者が複数いる。同書には剛造が遊里へ足繁く通った記録も多く含まれていることから、田原剛造は明治三十五年（一九〇二）に同校を卒業した田沢震五の偽名であり、同書で田原剛造の体験談として語られているのは田沢自身の体験談であると考えられる。他にも放蕩や学業不振など本人の名譽を傷つける事績に関して名前が挙がっている人物は、多くの場合偽名と見られる。

(36) 本文第二章掲『鹿兒島県百年（中）明治編』には、「田村は開成学校（東大の前身）の出身で生徒の人気も抜群だった。うけたのは彼独特の授業法である。まず教室で実験をやってみせてから講義に移り、次の日はその実験・講義について質疑応答。二日ずつこれをくり返し、月末に一カ月間の課程について質疑を行なう。『ゼミナール』のはしりだ」とある。

(37) 『大日本窯業協会雑誌』第六卷第六十三号（明治三十年（一八九七）十一月大日本窯業協会）の「論説報文」に典瑞による第三十九次講談会席上演説「フェルガソナイト（磁器黄色顔料に就て）」が掲載され、ルチルと推定されていた鉱物を分析した顛末が述べられている。立花昭「黄色釉下顔料の開発について―飛鳥井黄」と欧州諸窯の状況」（令和三年（二〇二一）三月『岐阜県博物館調査研究報告』第四十一号）には、「東京帝国大学の菊池安が最初に中津川で採集し、これを農商務省地質調査所の田村典瑞が分析してフェルグソナイトであることを突き止めた。これとは別に飛鳥井孝太郎もこの鉱物を直接、現中津川市高山の鉱山で取得して黄色顔料になり得ると確信し、瀬戸陶器学校の寺内信一の試験<sup>4)</sup>よって黄色釉となることが証明された。（中略）のちに、飛鳥井と田村が面会した際、飛鳥井はこの鉱物がフェルグソナイトであることを、また田村は磁器の黄色顔料となったことを知る」とある。

(38) 注(35) 同書で、「化学工芸会々員三幅対」と題して「白面」「黒面」や「白髪男」「色男」といった外見的特徴、「愛嬌家」「真面目家」といった性質的特徴、「酒好き」「大酒家」「文学家」「好角家」「釣好」といった趣向的特徴など多彩な分類に基づき三人ずつ名前を挙げている。田村典瑞は「議論家」「酒好き」「骨董家」「世話好」「気の短かき人」に名が挙がっている。

(39) 注(35) に同じ。



- (40) 日本美術年鑑編纂部『明治四十五年』大正元年度 日本美術年鑑』第三卷（大正二年（一九一三）十一月画報社）に「奥山保号古研 明治一二年三月九東京生、図案製作業、師在原古玩、川崎千虎、福地復一、今泉雄作、三三年七月美術学校図撰科卒」とある。
- (41) 下館町郷土史調査会編『下館町郷土史』（昭和十五年（一九四〇）二月下館町役場）より引用。
- (42) 茨城県史研究会編『茨城県史』（昭和五年（一九三〇）八月茨城県史刊行会）参照、引用。
- (43) 注（42）に同じ。
- (44) 慶応二年（一八六六）二月二十一日はグレゴリオ暦一八六六年四月六日である。
- (45) 『集古』（大正十三年（一九二四）十二月集古会）乙丑第一号の有田兎毛三が出品した奥山正路所用木印八個の記録の「正路は金剛次子」という付記により、金剛には正路という二男がいたことが判明する。奥山正路は東京府の技術職員として勤務していたらしく、明治三十六年（一九〇三）から同三十九年（一九〇六）印刷局発行の『職員録 乙』に東京府吏員工手として掲載されている。
- (46) 明治三十八年（一九〇五）五月集古会『集古会誌』乙巳第三号掲載「集古会規則」より引用。同年三月『集古会誌』乙巳第二号掲載の会員名簿には佐佐木信綱や榎本武揚、柳田国男、江見水陰の名がある。
- (47) 注（46）掲『集古会誌』乙巳第三号に入会者として日本橋区浜町二ノ一、有田兎毛三と記載され、紹介者は早川久三郎とある。
- (48) 明治四十一年（一九〇八）三月『集古会誌』丁未第四号の前年五月十一日於青柳亭開会第六十三回出品目録に印七顆、奥山金剛印譜十一帙、林斎印譜一幅の有田兎毛三三出品物が含まれている。その他、『集古会誌』甲寅第四号（大正五年（一九一六）七月集古会）の大正三年（一九一四）五月九日神田青柳亭での第九十八回出品目録には奥山金剛印譜一百二十冊が記載されるなど、奥山金剛に関する品を多く出品している。
- (49) 『集古』辛未第二号（昭和六年（一九三一）三月集古会）に「辛未年賀帳より」と題して九人の会員の漢詩や歌、俳句、小唄が紹介されている。

(50) 『集古』 庚申第三号 (大正九年 (一九二〇) 六月集古会) 参照、引用。

(51) 遺族提供の戸籍謄本によればエイは徹より十一歳下の明治四十年 (一九〇七) 生まれ、新潟県中蒲原郡の田代栄助二女で昭和五年 (一九三〇) 二月十八日に徹と結婚している。徹は柏崎女学校に勤務していたので、新潟県出身のエイと知り合ったのだらう。

(52) 戸籍謄本には典瑞四女・幾子は明治三十三年 (一九〇〇) 十一月二十九日生まれ、昭和八年 (一九三三) 四月二十四日東京市本郷区駒込林町の平山海蔵と結婚とある。遺族によれば、幾子の他に成人した豊彦の妹は、『第十七版 人事興信録』下巻 (昭和二十八年 (一九五三) 九月人事興信所) に「ローマ字論語」を著した八木理三の妻として名が挙がっている明治二十四年 (二八九二) 八月十二日生まれの典瑞長女・澄、松井鉄四郎に嫁した明治三十一年 (二八九八) 十月二十一日生まれの典瑞三女・静子である。

(53) 内容の参照や引用は、所蔵している遺族の承諾が得られていないため行っていない。

(54) 『集古』 庚申第五号 (大正九年 (一九二〇) 十月集古会) 参照。

(55) 典瑞長女・澄の縁談と推測されるが、法学士の夫を持つ豊彦の妹はいないことからこの縁談は成立しなかったと考えられる。

(56) 遺族提供。明治三十九年 (一九〇六) 一月十三日の消印が押されている。宛先は京都市上京区百万遍西門西村方の田村豊彦であり、第三高等学校の寮を出て下宿していたようである。

(57) 注 (53) に同じ。

#### 〔付記〕

引用文は現行の字体を用い、斜線で改行を表し、適宜ルビを省いて明らかな誤りを改めた。豊彦の遺品や短冊、戸籍謄本を提供し協力してくださった豊彦の遺族にはこの場を借りて改めて深く感謝申し上げます。

(京都女子大学非常勤講師)